

震災、戦災と二度の辛酸を味わう

東京都 小林 實

私は、大正十三（一九二四）年十月十日、東京府浅草区新福富町二番地（現在の東京都台東区寿町三丁目）で父小林孝二郎・母チカの三男として生まれました。私が生まれたのは、あの関東大震災があった大正十二年九月の翌年でした。

関東大震災は、東京府の下町一帯が焼野原となり特に浅草区本所区はひどく、被服廠跡は多くの大人に混じり子供たちも震災を被った話を聞きました。幸いにも私の家族は災難を免れたことや、当時の惨憺たる状況と惨状を両親から子供の頃に聞かされ胸が熱くなった記憶があります。

私の家族は、父、母、長男健太郎、姉トシ子、次男勝二、弟達夫の七人家族で、震災前までは同所にいました。その後、昭和十二（一九三七）年五月、東京府蒲田区道塚町四〇二番に転居しまし

た。

戦後は、六郷土手に沿って流れる六郷川辺の静かな住宅街で、ごく自然的環境の中で毎日を過ごしました。兄健太郎は、名古屋にて工場経営を営んでおり、姉トシ子は嫁いでいます。次男勝二は静岡県浜松市三方ヶ原中部第九十七部隊武井班に入営後、比島派遣となり部隊名は第一〇六五部隊上田隊に所属しました。弟達夫は、陸軍航空士官学校第六十期で任務についていました。

私は、昭和十二年三月、東京府浅草区北富坂町精華尋常小学校卒業。同年五月東京府立電機工業学校入学ですが昭和十五年八月同校を中退しました。

当時私は、第二次世界大戦開戦数カ月前の昭和十六年四月に飛行機の搭乗員を目指して、仙台飛行機搭乗員養成所に入学しました。昭和十九年三月、同校を卒業しました。職歴は、二等操縦士免許取得を皮切りに二等航空士免許取得。その上、今度は、二級滑空士の免許を取得しました。

昭和十九年四月、ジャワ派遣第三十五航空飛行

隊入隊。同月第三十五教育飛行隊に入営。ジャワ島スラカルタ等派遣命令で任務につくため、私は所属していた浜松部隊には一週間いましたが、空路にて浜松―九州知覧―沖縄那覇―台湾屏東―フィリピンのマニラ―ボルネオラブアン島アピ―ボルネオクチン―ジャワ島ジャカルタ等数多くの所を転戦しながら移動しました。これに陸路でジャカルターバンドーンスラカルタに入りました。

昭和十九年八月、スマトラ島レンバクの第九練成飛行隊に転属しました。同年九月には、仏領インドシナのサイゴンエリアで第八練成飛行隊に転属命令が出ました。昭和二十年八月、帝都防空戦隊・飛行第十一戦隊に転属命令がでしたが、この移動は空路でした。

昭和十九年、ジャワ島スラカルタからスマトラ島レンバクと防空任務につきながら、一式戦（隼）の訓練及び実技に日夜励み、昭和十九年九月にシナガポールを経由してインドシナのサイゴンに転

属命令ができました。

ここで四式戦（疾風）に機種変更をして実技訓練をしながら防空任務に就きました。この年は何事も無く過ぎ、昭和二十年を迎えると戦局は一段と厳しさをまし、一日中緊張の連続でした。勤務時間は早朝から日没までサイゴンの飛行場では騒音と激務の中での任務の遂行をなした毎日の生活でした。

昭和二十年一月十二日、早朝勤務者一個中隊がいるとき、監視隊より「味方小型機がサイゴンに向かう」との連絡が入りましたが、今時、ましてや早朝なので変に思い、一式戦二機を偵察のため離陸させました。それからまもなく、米軍艦載機のグラマン「F6F」が七、八十機編隊でどつと来襲しました。

その様子は、サイゴン飛行場上空を乱舞する有様でした。我が方は、地上には高射砲や機関砲等が無く、全く無防備で、すぐ四式戦のエンジンをフル回転させ次から次と滑走路に出し、試射しな

がら敵グラマンが空中で乱舞している中を一気に離陸しました。飛行機が離陸して安定するまではしばらく直進しがなく、瞬時に上空の敵からは、激しく攻撃を受ける。たまったものではない。残念だがたちまち、次から次と離陸した四式戦は撃ち墜され、離陸した四機は全部が大空に散った様子を目の当りにしました。

我が戦隊長は、この時これらの状況をみて発進中止の命令を出したので待機することになりました。これから敵機は次から次と入れ替わり、延百機以上が乱舞しながらの攻撃を仕掛けてきました。そして我が方は散々破壊されました。空襲が終わったあとの空しさは無念のかぎりでした。地上にあった飛行機もやられ、存在するものはわずかに二十数機となってしまいました。

これからは毎日B-24（コンソリデーデット）が偵察をかねて高高度で侵入します。しばらくすると敵戦闘機「双胴P-38」が飛来し攻撃をかけってきます。敵が何機こようとも我が方は飛行機温

そうして機首を反転して反撃をしようとする。これらの繰り返しで空中戦は、敵機との混戦に終りました。

僚機も同じ思いのため援護し合う暇がない。敵は、油槽船団の爆撃を終わって帰還したので船団の安否を確かめたが、五隻のうち二隻が破損したらしく、速力も落ちて船内は火の海となっていました。機数が少なくて防衛も空しく、船団を爆撃されたのは残念、無念であった。

空中戦が終わってサイゴンに引き返した後には全機帰還と思っただけですが、二機とその搭乗員が未帰還でした。この度の戦果は分からずただ疲れました。

私が、比島方面より来るP-38に一番苦労したのはサイゴンでした。一月に空襲をうけるまで、空中勤務者は六十人ぐらいいましたが、その約半数の三十人が内地勤務となり、シンガポールより病院船にて帰国するはずが、なんとなくばれて止むなくバラバラで内地に向かいました。

存のため出撃するのは二、三機です。多勢に無勢の状況では、時には撃ち墜とされる始末で止むなしです。毎日この繰り返しです。

四月中旬命令がでました。「我が輸送船団五隻南方より北方、これを援護せよ」サンジャク沖（サイゴンの南）から中部仏印のツーランまで（現在のユエ）の上空の援護命令で、勇躍して出発しました。我が方は、戦隊長を先頭に最大機数二十機で出撃しました。行先はカムラン湾沖で、カムラン湾洋上を味方輸送船五隻が北進するものを援護するためでした。輸送船とは油槽船のことで内地に向かつていました。すると来ました、米軍爆撃機B-25（ノースアメリカン）二十機と、その上空には護衛するP-38戦闘機が約三十機編隊です。戦闘開始だ。まず油槽船団を守ることが先決だ。戦隊長の命令が全機の戦闘員にとどくと同時に、我が方が一斉に爆撃機に先制攻撃をしかける。射程距離に敵が入ろうとする直前に曳光弾が一瞬機体をかすめた。左に切り替えてこれを回避する。

病院船は、攻撃されず沈められないと思ったのですが実際には沈められました。私の同期生も半分はこの大戦で戦死しました。

その後、南方方面の搭乗員は全員特攻要員となりました。そのうちボツボツと内地帰還命令が出て帰国しました。つまり本土決戦のために特攻要員として帰るのです。本土決戦です。

私は同僚六人と共に本土に向かいました。サイゴン―ブノンペン―ツーラン―台湾のコースでした。そしてさらに台湾より南京―天津―朝鮮京城（ソウル）―内地の米子飛行場に到着。さらに米子―富山―立川等は六月に命令を受けましたが、実際に内地に着いたのは八月でした。南方の爆撃隊は第五航空として主に輸送に当たっていました。航空隊所属には、重要視された神風特攻隊の存在があります。先輩、同僚、後輩等多くの戦友仲間が各隊にいました。万朶隊（近藤行雄）、勤皇隊（勝又満）、二百四戦隊（田川唯雄）の戦友等が特攻隊員として出撃し、敵機との勇猛果敢な戦いは、

我が身の死を覚悟した上での出撃であり、数千の特攻隊員の名誉ある戦闘任務は忘れることなく、生き残った者が後世に語り継ぐ義務と責任があると思う。

私の特攻隊（搭乗員）での軍隊生活は、帝都防空戦隊飛行第十一戦隊が最後の任務となつて終戦を迎えました。

—我が想い出話は「鰻頭」が今生の別れ—
昭和十九年三月、浜松航空隊に入営した時、ある日の夕暮れ私に食事をもってきた兵隊（二等兵）が、「食事を持ってきました」と声を掛けてきたので振り返ると奇遇にもそこには兄勝二がいました、とつさに「兄さん」と声を掛け懐かしさにひたりました。

浜松の部隊に兄が入営したのは知っていたが、まさか再会しようとは夢にも思わないので、当日の週番将校にお願いをしてその日、消灯過ぎ頃（二十三時）まで語りあいました。兄さんに「タバコ」を全部上げましたら兄は、酒保より「鰻頭」を買

これは駐留米軍が、戦争中日本軍特攻隊の戦闘状況を後世に残すために製作する戦争記録映画撮影の協力要請でした。呼ばれたのは、戦隊長、中隊長、私の三人でした。その翌日から日米合作で特攻隊員の勤務状況を記録するための撮影がスタートしました。映画の題名は「日本と日本人」でした。

特攻隊の出撃準備を撮るのだ。大國魂神社に参拝をして調布飛行場に到着する。それから、一式戦（隼）のエンジンを全回転し、搭乗までの機敏な動作や特攻隊員が出撃の際に全員で乾杯をした様子等を何度も撮影しました。

その後で米軍関係者と夕方、米軍将校クラブで会食をした時、居合わせた当時の米軍パイロットとお互いに戦争中の様子を振り返り語りあいました。双方とも戦場での様子を話すことはできずに終わってしまいました。

米軍がこの映画を撮影した映像には、米軍飛行機搭乗員との会話のシーンがありました。元特攻

つてきてくれました。別れ際に明日、また会おうと固く約束をして別れました。

私は、寝台でうとうととしていたら午前二時頃「明朝出発、午前四時までに準備せよ」との命令。出発の準備をしながら明け方飛行場に向かいました。兄とは再会の約束をして別れたのでした。連絡のしようもないまま飛行場に来てしまった。兄は、その後比島に派遣され、比島クラークフィールドにて名譽の戦死を遂げました。あの時の酒保からの鰻頭やたばこ等は、戦場での兄弟が束の間ではあるが、語りあつた会話は今でも脳裏から離れることはなく、私の生涯の幸せとして、想い出として忘れることは出来ないことです。これが二人の今生の別れとなつたのです。

終戦後、八王子に仮住いをしていた時の十一月頃突然「駐留軍（米軍第八航空隊）」より出頭せよとの命令がありました。当時八王子警察署の方が心配をしてくれ、翌日米軍第八航空隊に出頭しました。

隊の操縦士として私が映画に登場したので上映を心待ちにしていました。アメリカ国内での上映が目的で撮ったので、日本での試写会も無く観ることは出来ませんでした。

復員後は、関東大震災の教訓を生かし、敗戦でいたる所が荒廃し廃虚化となった国土を見て、戦後復興のために汗を流しました。今では震災や戦災と二度にわたり、尊い人生経験を味わったと思つています。亡き戦友のご冥福を心からお祈りします。